

追悼 “秋山和慶さんを偲んで”

プログラム

今年の1月26日、日本を代表する名指揮者のひとり、秋山和慶氏が亡くなりました。享年84。昨年の小澤征爾氏に続いて、かけがえのない日本指揮界の重鎮を失いました。今日は残されたライブ音源を聴きながら秋山和慶氏を偲びたいと思います。

秋山和慶は1941年1月2日、東京で生まれました。1956年、桐朋学園高校ピアノ科に入学、翌年指揮科に移り、齋藤秀雄に師事しました。1963年、桐朋学園大学指揮科を卒業すると1964年2月東京交響楽団を指揮してデビュー。同年4月にはこの楽団の指揮者となり、1968年から音楽監督・常任指揮者に就任、2004年まで36年にわたって指揮者をつとめ、2004年からは桂冠指揮者となりました。1986年から1994年まで大阪フィルハーモニー交響楽団首席指揮者、1988年から1994年まで札幌交響楽団首席指揮者、2004年から2013年まで九州交響楽団首席指揮者、2004年から2017年まで広島交響楽団音楽監督・常任指揮者などを歴任。1984年、恩師・齋藤秀雄の没後10年にあたり、師を称えて世界中から第1級の演奏家が集結した特別オーケストラによって行なわれた「齋藤秀雄メモリアル・コンサート」では、小澤征爾とふたりで指揮をし、後の「サイトウ・キネン・オーケストラ」誕生の切っ掛けとなりました。1987年には「サイトウ・キネン・オーケストラ」として初のヨーロッパ演奏ツアーを行ない、ここでも、小澤征爾とともに指揮台に立ち、高い評価を得ました。海外では、1968年から1969年までトロント交響楽団副指揮者、1973年から1978年まで年アメリカ交響楽団音楽監督、1972年から1985年までヴァンクーヴァー交響楽団の音楽監督をつとめ、ヴァンクーヴァー交響楽団からはその後、桂冠指揮者の称号が贈られました。さらに1985年から1993年までシラキュース交響楽団音楽監督などを歴任。1987年デビューのシカゴ交響楽団をはじめ、ボストン交響楽団、ニューヨーク・フィル、フィラデルフィア管、バイエルン放送響など、欧米の一流オーケストラへの客演も多数。また、若手音楽家の育成にも積極的で、幾つもの学生オーケストラを指導しています。抜群のバトンテクニックを持ち、バランス感覚に優れた安定した音楽創りは、楽員からの信頼も厚く、誰からも慕われる貴重な存在でした。今日は、ヴァンクーヴァー交響楽団を率いて初来日した33歳の1970年代、サイトウ・キネン・オーケストラが初のヨーロッパ演奏ツアーを行なったおりの46歳の1980年代、そして広島交響楽団とアルグリッチが共演した74歳の2000年代の演奏をお聴きいただきたい思います。(中川)

リヒャルト・シュトラウス (1864~1949) : 交響詩 “テイル・オイレンシュピーゲルの愉快な悪戯” Op.28

秋山和慶指揮 サイトウ・キネン・オーケストラ
(1987.9.11 ベルリン・フィルハーモニーホールでのLive)

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン (1770~1827) : ピアノ協奏曲第1番ハ長調 Op.15

マルタ・アルグリッチ (ピアノ)
秋山和慶指揮 広島交響楽団
(2015.8.11 サントリーホールでのLive ~広島平和コンサート~)

*** 休憩 ***

エクトル・ベルリオーズ (1803~1869) : 幻想交響曲 Op.14

ベドルジーハ・スメタナ (1824~1884) : 歌劇 “売られた花嫁” ~道化師の踊り

秋山和慶指揮 ヴァンクーヴァー交響楽団
(1974.9.25 NHKホールでのLive)

曲 目 解 説

リヒャルト・シュトラウス:交響詩“テイル・オイレンシュピーゲルの愉快な悪戯”Op.28

ドイツ・ロマン派の最後に輝く巨星、リヒャルト・シュトラウスは幼少から音楽教育を受け、6歳で作曲を始めたという天才で、ウィーン国立歌劇場やベルリン・フィルの指揮者を歴任するなど、指揮者としても一流でしたが、作曲作品では、各分野で優れた作品を残し、特に交響詩では大管弦楽を自由自在に操り、豊かで色彩的な響き、生き生きと語られる性格描写は素晴らしいものがあります。**交響詩“テイル・オイレンシュピーゲルの愉快な悪戯”**は7曲ある交響詩の4作目にあたり、1894年から1895年にかけてミュンヘンで作曲、1895年11月5日、ケルンのギュルトツェニヒ・コンサートにおいて、フランツ・ヴュールナーの指揮で初演されました。テイル・オイレンシュピーゲルは、14世紀頃、北ドイツに実在したという伝説的な人物で、本職は靴屋でしたが、生まれつきのいたずら好きで、ドイツを放浪して歩きながら、いたずらの限りをつくします。伝説では、絞首台を逃れて、安らかにベッドの上で息をひきとったと伝えられていますが、この曲では、主人公を絞首刑にして、劇的效果を高めています。曲の序奏部は「昔々、テイル・オイレンシュピーゲルという悪漢がおったとさ」というお伽話のまくら言葉のように始まり、最後のエピローグで、ふたたび序奏部の旋律が現れ、「死んだあとも、テイルは陽気でいたずら好きなのだ、おしまい」と、曲はオーケストラの笑いのうちに終わります。シュトラウス自身が「古い悪漢物語によるロンド」と呼んだ、傑作交響詩です。

ベートーヴェン：ピアノ協奏曲第1番ハ長調Op.15

ドイツが生んだ音楽史上最も偉大な作曲家、ベートーヴェンは、8歳で人前で演奏して、神童とうたわれたピアノの名手でもあり、32曲のピアノ・ソナタをはじめ、ピアノ作品は数多くありますが、協奏曲は5曲を作曲しました。**ピアノ協奏曲第1番ハ長調**は、ウィーン滞在中の1794年末から1795年にかけて作曲され、ピアノ協奏曲第2番変ロ長調は1786年から1795年にかけて作曲されています。第2番の方が先に作曲されたわけですが、2曲とも改訂が行なわれ、第1番が先に出版されたため、番号が逆になっています。初稿の初演は1795年3月29日、ウィーンの音楽家協会主催によるチャリティ・コンサートで、ベートーヴェン自身のピアノとアントニオ・サリエリの指揮でブルク劇場において行なわれました。このコンサートで演奏された曲は、長らく第2番と言われてきましたが、近年の研究によって第1番だった事が確実視されています。このコンサートが、ベートーヴェンのウィーンでのデビューとなりました。第1番と第2番はモーツァルトの協奏曲の影響を指摘されますが、ベートーヴェン自身の個性の芽生えもはっきりと認められ、第1番は第2番に比べて規模もひとまわり大きくなり、構成力での進歩も著しい初期の名曲です。

第1楽章 アレグロ・コン・ブリオ 第2楽章 ラルゴ 第3楽章 ロンド、アレグロ

ベルリオーズ：幻想交響曲Op.14

フランスの作曲家ベルリオーズは、「標題音楽」という新しいジャンルを確立し、伝統的な形式にとられない自由な作品を生み出しました。劇的で色彩的な管弦楽法は、多くの作曲家に影響を与えています。ベルリオーズは、1827年パリでイギリスの劇団がシェークスピア劇を上演、その主演女優ハリエット・スミットンに心を奪われた事が刺激となって創作力を掻き立てられ、のちの「幻想交響曲」を生み出す原動力にもなりました。古典主義最後の巨匠ベートーヴェンがこの世を去ってから3年後の1830年に、27歳の青年ベルリオーズは、交響曲という古典形式に「標題」というきわめて具体的な内容性を盛り込んだ画期的な交響曲である**幻想交響曲**を完成させました。ベルリオーズはこの曲にこのような標題を付記しました。「異常に鋭い感性と豊かな想像力に恵まれたひとりの若い芸術家が、望みのない恋の絶望に打ひしがれ、阿片におぼれて自殺をはかる。しかし薬の量が足りなかったため、死にはいならず、昏睡状態のなかで奇妙な幻想を夢みる。この幻想の生み出す感動と情熱と想像とが、彼のしびれた脳裏をよぎるとき、音楽的映像や曲想に変形され、固定楽想(イデー・フィクス)として、たえず恋人の姿がひとつの旋律となって、浮かびあがるのである。」1830年4月に完成した楽曲は、同年12月5日に、友人の指揮者フランソワ・アブネックの指揮により初演されました。1845年に出版、その後何度かの改訂が行なわれていますが、今日最も演奏頻度の高い名曲として親しまれています。

第1楽章 夢と情熱 第2楽章 舞踏会 第3楽章 野の風景 第4楽章 断頭台への行進
第5楽章 ワルブルギスの夜の夢

スメタナ：歌劇“売られた花嫁”～第3幕「道化師の踊り」

チェコ国民主義音楽の祖と呼ばれるスメタナは、音楽好きのビール醸造人であった父のもと、早くから楽才をあらわし、6歳の時には公開演奏会でピアノを弾き、8歳で作曲を試みるほどでした。当時チェコはオーストリアの統治下にありましたが、革命の波はスメタナの心を動かし、積極的に参加して作曲にも反映させていきました。オーストリアがイタリアに敗れた結果、ボヘミアに新しい希望が芽生え、チェコ人のための歌劇場を設立。スメタナは新しい民族音楽を作り出すための指導的人物として活躍しました。そして国民の要求に報いるため、8つの愛国的歌劇を作曲、その第2作が3幕からなる歌劇**「売られた花嫁」**です。「引かれあう若い農夫と豪農の娘が結婚仲介屋の悪巧みにあいながらも、最後には結ばれる」というボヘミアの古い物語を題材にしたコメディ風のオペラで、民族舞曲や民謡の要素をふんだんに取り入れた名曲です。最も有名な、交響詩「わが祖国」と並ぶスメタナの代表作のひとつに数えられています。